



Title	<書評>村田充八著 『キリスト教と社会学の間』
Author(s)	佐々木, 美和
Citation	宗教と社会貢献. 2017, 7(2), p. 53-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/65072
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評

村田充八著

『キリスト教と社会学の間』

晃洋書房、2017年3月、A5判、347頁、5200円（税抜）

佐々木美和*

「キリスト教」と「社会学」両者の関係を、それぞれの精神に敬意を払いつつ丁寧に描ける学者は少ないだろう。本書の著者であられる村田充八氏は現在、阪南大学で宗教社会学などを中心に教えておられ、本書の他にも「社会的エートスと社会倫理」や「宗教の発見－日本社会のエートスとキリスト教－」などの著作がある。評者は、村田氏と2017年春、学会において初めて対面し挨拶をすることができた。不勉強ながら本書が評者にとって初めて読む村田氏の本である。

さて、本書のいくつかの部分は、村田氏が文中で言うように、他の著作と被るところが多くある。それは、本書のいくつかの部分が他の講演・講義内容をまとめたものであるためだ。また、同様の理由で、本書は章や、ひいては節ごとにきれいに独立したテーマを描いていることもあるため、本書の目次を詳細に記し全体像を明らかにしておくことは読者にとって有益だろうと思われる。以下に目次を示すが、本書に終始一貫しているテーマは題名の通り「キリスト教と社会学」であり、内容のキーワードは「キリスト教」の視点と社会的視座はもとより、職業、環境、教育、規範、女性、倫理、死生観など多岐にわたる。

第I部 キリスト教と社会学の間

第一章 キリスト教と社会学の間

—聖書から読み解く社会と人間—

一節 はじめに

二節 職業とキリスト教の召命観（第一講）

一 はじめに

二 キリスト教と社会学

三 キリスト教社会学の視角

* 大阪大学大学院人間科学研究科・博士前期課程2年・m.kuro-neko@hotmail.com

- 四 ベルーフ*の宗教的前提
- 五 ルターの確信としての召命と職業
- 六 職業召命論—マックス・ヴェーバーの分析
- 七 おわりに—聖書における労働の倫理

第二章 キリスト教有神論と環境問題

—神の創造とスチュワード（管理人）—

- 一節 はじめに
- 二節 ベックの「危険社会」論—境界が定まらない危険—
- 三節 バベルの塔と神の文化命令に背反する人間像
- 四節 宗教と環境破壊
- 五節 キリスト教有神論と環境問題
- 六節 神の創造と主権
- 七節 要約と展望
- 八節 おわりに—神のスチュワードとして生きるということ—

第三章 教育と社会学—教育社会学の源流とキリスト教の教育—

- 一節 はじめに
- 二節 教育と社会学
- 三節 教育社会学の源流
- 四節 教育社会学と学歴社会論
- 五節 社会学と人間
- 六節 おわりに—キリスト教の教育—

第四章 社会的規範とネットワークの社会学

—日本の女性と社会倫理—

- 一節 はじめに
- 二節 日本の社会と女性
- 三節 社会的規範と女性
- 四節 新しい行動規範と組織変動
- 五節 ネットワークと「女縁」
- 六節 おわりに—「選択縁」としての宗教と女性—

第Ⅱ部 宗教と社会倫理の間

第五章 宗教とソーシャル・キャピタル

一節 はじめに

—社会分析の指標としてのソーシャル・キャピタル論—

二節 ソーシャル・キャピタル概念の「場」と人間

三節 ソーシャル・キャピタルを用いる人間と宗教

四節 宗教の本質としての「往相」と「還相」

五節 キリスト教のコンパッションとソーシャル・キャピタル

六節 おわりに—宗教的ソーシャル・キャピタルへの期待—

七節 付説『宗教と社会』ブックレビュー

第六章 悪と死の倫理

—人間の本性、社会のエートス、宗教的共生—

一節 はじめに—概要、社会倫理学と宗教社会学—

二節 ベックの「危険社会」論—人間の企てと本性としての悪—

三節 あるべき倫理とある倫理

四節 キリスト教と悪の倫理

五節 親鸞の悪をめぐる山折哲雄の論点

六節 現代社会と死の倫理の様態

七節 宗教的根本構造—日本の「死」生観—

八節 聖書と聖クルアーンにみられる死生観

九節 死をみつめさせない社会のエートス—社会学的視点—

—〇節 「共生」の視点—共生（「死に支え」）の大切さ—

—一節 共生の場—「死に支え」の場としての宗教—

—二節 宗教の反共生とコンパッションの世界

—三節 人間の悪と「悪の象徴」アウシュヴィッツ

—四節 おわりに—共生社会において死をみつめて生きる—

上記の目次を眺めるだけでも、本書の概観をだいたい把握することができる。これだけ多岐にわたる内容を、村田氏は紐解いていかれる。それもひとつひとつの語源からはじまり、非常に丁寧なやり方でされるのである。

たとえば、上記の目次の部分、第一章二節四項に「ベルーフ」という文字がある。本文ではその後ろに*ではなく、原語で書かれているが、ここでは*をつけさせて頂いた。

ベルーフとは、ドイツ語で言う天職のことであるが、これはルターが聖書を翻訳したときに自分なりに加えたニュアンスのようなものも含まれている言葉であり、そこから派生したプロテスタントにおける<職業>観の形成、ついでヴェーバーの「プロ倫」へと論が展開されていく（第一章 pp20-23）。このように本書には、ひとつひとつの言葉のニュアンスにも気を付けて説明がなされ非常に興味深い。

本書を読みつつ、感銘を受けた部分は数多くあるが、身に染みて思わされたことを一つ上げたい。実は、社会学を学ぶ信仰者として、学ぶところが大変多かった。信仰を持つ者というのは、肩書よりも何よりもまず信仰を第一にすることを求められる（少なくともいわゆる一神教の宗教を信仰する者はそうだろう）。<共生学>という分野に籍を置く評者の身の回りにも、キリスト者やムスリム・ムスリマの方々をはじめとした信仰を持つ学生の方々がいる。グローバル化の一途をたどり続けているこの国において、どのように共生しどのように信仰を表明するか、学問や研究内容の内にとどの程度、どういう視点で自身の信仰を他者に説明し開示していくか……といったことは、今後もっと多くのひとが考えることとなる事柄なのではないだろうか。

実は読み始めた当初、村田氏の自己開示的な文章と並行してわかりやすく語られるキリスト教の本質の部分は、はじめ「学術的内容の本であるにもかかわらず、キリスト教について過度に語り過ぎているのではないだろうか」と感じられた。ところが、自身を振り返ったときに、評者が平素からこれだけキリスト者でない方々から「(研究の内容が)意味が分からない」

「(佐々木の)言っていることの意味が分からない」と言われていたかを思い返した。そのようなご指摘を頂くのは多くの場合、評者がキリスト教の背景知識について平素に説明した場合であったように思う。村田氏の徹底した、相手にわかりやすいように説明される誠実な姿勢に学んだ。一介のキリスト者でなく、研究をする立場のキリスト者になった評者にとって村田氏の本著作は、(不勉強ながら)初めて目にする、また大変参考になる文章で

あった。上記のことは、本書の途中で著者が言っているように、筆者が自身を「中立である」と常に自覚できている証拠であるように思われる。説明できるというのはその分、自分が何を考えているのかをもう一步後ろに下がって試みていることの証拠でもある。つまり、メタ的に自身を見ていることであり、より客観的・中立的に自身と社会を見ることのできる可能性があるということでもある。筆者はどちらかといえば信仰について過度にテキトウに説明してきたのかもしれないと反省した。と同時に、筆者は、丁寧に説明するというのを、どこか自己本位的にならないかと懸念していたのでもあった。しかし中立性や自己の立場を丁寧に説明することは大切である。

無論、本書の中にはキリスト教についての概説のみが収められているのではない。それどころか、実に様々な先達の名を挙げて論に組み込んでいかれており、本書の末尾には人名索引がついているが、恐らく 240 名ほどを超える名が連なる。この後にも書いているが、この索引をとっても、社会学を学ぶ、もしくはキリスト教関係を研究対象としたい者にとってみれば大変ありがたい索引であろう。また、その人名索引に並ぶ名の面々は社会学の著名な学者だけにとどまらず多岐の分野に渡り、造詣が深い一冊である。人名索引の他、索引として他に事項索引と聖書索引も収められている。

本書の題名である「キリスト教と社会学の間」は、本書の内容を簡潔に表している。「キリスト教」について記されたわかりやすい本は、例えば C.S. Lewis の *Mere Christianity* など多くの著名な学者によるわかりやすい著作がある。しかしなによりも本書がその他の諸本と一線を画するのは、題名の通り本書にはキリスト教だけでなく「社会学」との関係性をめぐる丁寧な論考が収められていることであろう。社会学の周辺—職業社会学、社会倫理学、宗教社会学など—を「キリスト教」の観点を丁寧に紹介しつつ述べた内容である。それも、「キリスト教」と「社会学」両方についてのビギナーにとって格好の手引き、頭の整理をされる書となると考える（評者がそうだった）。特に「キリスト教」については、著者と同じくキリスト者である評者の視点からも著者のバランスの取れた説明と、歴史的変遷や語の源流から抑えた間違いのない（と思われる）説明に感銘を受けるばかりであった。キリスト教を調査の対象としている研究者には、キリスト教の社会・文化的背景や思考体系を知るためにも本書を手に取り一読することを強く勧めたい。

参考文献

村田充八 2005 『社会的エートスと社会倫理』 晃洋書房。

村田充八 2010 『宗教の発見—日本社会のエートスとキリスト教—』 晃洋書房。

Lewis, C. S. 1952 *Mere Christianity*. Macmillan.